

研究成果報告①

我が国のインクルーシブ教育システム構築に関する総合的研究

報告者

星 祐子（国立特別支援教育総合研究所）

金子 健（国立特別支援教育総合研究所）

研究協力者

河合 康 氏（上越教育大学教授）

小林 倫代 氏（国立特別支援教育総合研究所名誉所員）

司会

横山 貢一・原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

まず、研究代表者の原田上席総括研究員より本研究の趣旨及び目的について説明を行った後、星上席総括研究員と金子総括研究員より本研究成果について報告がなされた。星上席総括研究員からは、都道府県・市区町村教育委員会と小・中・高等学校及び特別支援学校を対象に実施した「インクルーシブ教育システム構築の現状に関する調査」の結果の概要について報告した。また、金子総括研究員からは、「評価指標（試案）」の作成の目的や手続き、指標の構造及び各項目の内容について説明をした。

（以上、要項 P 8、プレゼンテーション資料 P22－41 参照）

〈参加者からの質疑応答〉

質問者：（自身は）特別な支援の対象を貧困やネグレクトも含めて捉えているが、国内調査で「障害のある幼児児童生徒」と「特別な支援を必要とする児童生徒」と表現を使い分けしている。その意図は何か。

星上席総括研究員：学校を対象とした調査では、障害の判定がなされている子供と判定はないが気になる子供で支援が必要である子供とに分けて質問した。支援体制に関する質問項目では障害に対応しているということを意図し、「障害のある」を使用した。一方、配慮に関する質問項目では、障害の判定の有無に関係なく行われていると考え「特別な支援を必要とする」という表現を使用した。

質問者：評価指標（試案）の「教育課程」は、インクルーシブ教育ではどのような形になるのか。ヨーロッパの指標を踏まえると、評価指標（試案）はシステムについての評価なのか。障害のある子供とない子供が共に学ぶことが、この評価指標（試案）ではどのように評価されるのか。

金子総括研究員：評価指標（試案）では、教育課程については「特別の教育課程」を編成

すること、カリキュラムマネジメント、全職員で教育課程について共通理解することを示している。当初の作成段階では子供に力がついたのか、学習に参加したのかを「施策・方針」、「実践」を経て「結果」として評価することが必要と考えたが、試案ではそこまで含めていない。

〈研究協力者との意見交換〉

小林氏：①国内調査では学校種を分けて調査したが、評価指標（試案）では学校種をまとめている。インクルーシブ教育の成果が子供に影響することを考えると、その構成でよいのか。②評価指標（試案）をどのように活用すれば、子供の変化まで見ることができるのか。③評価指標（試案）の3つめのレベルが、「個人及び学級」となっている。学級は子供に関わる内容であるが、評価指標（試案）に含まれているのか。多様性を認めることが共生社会につながっていくと考えられ、通常の学級の子供が多様性を認めることをどのように評価するのか。

星上席総括研究員：①評価指標（試案）でひとまとめにしたのは、特別支援学校だけでは通常の学校の視点が抜けると考えたからである。通常の学校と特別支援学校をまとめることにより、連続性のある学びを重視したいと考えた。②評価指標（試案）の活用については、今後の研究を通して各学校での使いにくさや必要な項目が明らかになると考えられ、今後は学校種によって内容が分けられることも出てくるであろう。

金子総括研究員：評価指標（試案）の「施策・方針」は目標にあたる。その具体的な手立てが「実践」となる。学校では、目標に対して達成できているのかを議論する材料として活用してほしい。研究班内では、チェックリストも必要なのではないかと話している。評価指標（試案）の各項目については、子供のことを念頭において検討することが必要である。通常の学級の子供が障害のある子供の多様性を認めることについては、評価指標（試案）では「理解・啓発」で取り上げている。この実践の結果として、周囲の子供が障害について理解したのかを考えることが必要である。

河合氏：インクルーシブ教育システム構築の状況进行评估することは、イメージがわきにくいと思う。インクルーシブ教育システム構築の状況を把握する上で、評価指標（試案）は整理された項目で作成されている。これをチェックして取組が遅れていると評価するのではなく、常にフィードバックして改善していくのが評価指標の考え方である。前進する上で必要な視点に気づくために評価指標（試案）を活用し、インクルーシブ教育の体制を進めていただきたい。評価指標（試案）の作成は初回であるため、たたき台である。

このため各立場で評価指標（試案）を見て、不足な点や必要な点を提言していただき、ブラッシュアップ、精査していただきたい。この際、自分に関連する項目だけを見るのではなく、全体を見て提言していただきたい。そして、自身に関連する項目と照らし合わせて相互に意見交換しながら良い評価指標にし、振り返るツールにいただきたい。国内調査の結果を見ると、多くの学校が特別支援教育コーディネーターを複数配置し、専任制

を行っている。実践が積み重なるとそれがエビデンスとなり、財務省の説得材料になる。実践している学校は調査票から特定できるため、その具体を見ていただきたい。評価指標（試案）の考え方については、イギリスのインデックスは3つの次元となっている。

一方、評価指標（試案）は、「施策・方針」、「実践」の2つで構成されている。イギリスのインデックスは、「インクルーシブな文化を作り出すこと」が基底になっている。評価指標（試案）では理念をカットしたが、底辺が重要である。システム（制度）には、見える制度と見えない制度がある。後者は、無意識に人間の行動様式を規定している。障害では、これらが大きな意味をもつ。見えない制度をどのように形作っていくかであるが、これにはいかにして知識を感性まで高めるかが大切であり、子供が感性として共生や多様性を身につけていくことがインクルーシブな文化につながっていくと考える。子供の感性が培われたかを見ていける評価指標にしていきたい。

〈まとめ〉

原田上席総括研究員より、以下について述べた。インクルーシブ教育はプロセスであり、そのゴールは子供の教育に還元されること（子供中心）である。また、地域の特性を踏まえてどのようにアプローチするのかが大切である。インクルーシブ教育を推進するためには、関連機関の動きも見ながら常に改善・改良することが必要となっている。評価指標（試案）の検証に向けて、まずは評価指標（試案）の存在を示していきたい。また、共生社会を目指していくためにインクルーシブ教育を支えるのは、特別支援教育の充実であるということ踏まえて、どのように地域に評価指標（試案）を広げていくのかを考えていくことも求められる。